

友達によく言ってもらったことがあった。

それでも変わらない毎日が目の前にあった。時々そうやって答えてもらってしまふことに、涙を流したものだ。

一人で探していたのはいつものこと。そしてそうして独りなのはいつものこと。泣いている表情を探している。

ただ、ただ、それだけ。

「消し飛んだ記憶」

いつものように。サヨナラを告げたのはいつものようなことなのだろうか。笑ってよ。鳴いてよ。泣いているからあの人は喜んだの？

わからないのよ。

どうしてもわからないけど。

それだけ大切なことがあったことぐらいはわかるから。いつものように。いつものように。

記憶が飛んでいるのはいつものこと。ぴよんと飛んで。

兎が飛んでいるのはいつものこと。ぴよんと飛んで。

笑顔に映えた。ぴよんと飛んで笑ったから？

二人で迫っていたのに。にこつとなつたから？

二つの記憶は今でも知っている。にこつとぴよんと飛んだから知っている。

知っていることは蒼空が綺麗に輝いているから。

いつものことを言っているのは当たり前なことだから。

それが愉しくて。

つつい、教えてあげたくなる。

それでも良いからと教えてあげたくなる。そんなにかわいいものではない。

そんなに楽しいことでもないけれど。

二人の世界はそうして完結してしまった。

悔しい限りだ。

本当に悔しい限りだ。

一人で涙を流している少年。紅涙。

寂しそうに道を歩く少女。寂寥。

いつも笑っているから。紅涙の寂寥。

その様は。わからないけれど。

人のことを教えてくださいと。私も知ってしまった。

地味に嫌なことが景色の上で踊っている。

嫌がらせの一部だろうか。

それでもいい。

ここには何も残されていない。だけど、一つの世界を間に残しているから、まだわかるとして。

時々、綺麗な瞳を持つ少女が現れる。

それが愉しくて。

それを観るのが嬉しくて。

景色が美しく、どこか遠い地平線を長閑に見れるのもまた良いと。

お月様をお願いとお祈りを重ねた。

一人で笑ってしまった少年。幸福。

笑顔を知ってしまったから。幸福感。

何も知らないと答えたのだから。幸せ。

少女は泣いた。不幸。

だから少女と少年は居るのだ。幸福の反対なんて存在しないのだから。